



神津島をもっと知ろう！

発行日：2021-01-14

コウヅのコウズ

Vol.1 花正月

1月14日は花正月！ ほうそう神様にお詣りに行って こどもたちの無病息災を祈ろう！

神津島では1月14日を「花正月」といい、子供たちが椿の枝とお団子を持ってほうそう神様にお詣りにいく日となっています。新型コロナウイルスが流行する今だからこそ、子供たちの健康、無病息災を祈りに、ほうそう神様にお詣りしてみてはいかがですか？

ー 用意する物 ー

椿の花の付いた枝

団子

団子をさす竹などの枝

トベラの葉（囲炉裏のある方）



※椿や団子が用意できなくても、お詣りは可能です。
学校や保育園が終わった夕方ごろにお詣りにいく
ことが多いそうです。

ほうそう神様のほうそうとは？ どうして椿なの…？

そもそも、ほうそう神様の「ほうそう」は「疱瘡」と書き、天然痘ウイルスが引き起こす感染症の事を指しています。疱瘡は世界の至る所で大流行し、たくさんの死者を出した恐ろしい病気でした。日本でも6世紀中ごろから流行し始め、ワクチンが開発される近代までは誰が感染して死ぬか分からぬ恐ろしい厄病とされていました。その畏れから伝染病は「疱瘡神」として擬神化され、人々は日本各地に「ほうそう」にまつわる物を残していました。奈良の大仏や日本各地の瘡守稻荷神社（かさもりいなりじんじゃ）もその1つです。また、疱瘡神は赤い物や犬、猿が苦手とされていることから、岐阜県の郷土玩具「さるぼぼ人形」や福島県の「赤べこ」は疱瘡除けを目的として赤くされているといわれています。こう考えると神津島で椿の花を供えるのは、椿の花が赤いからかもしれませんね。



さるぼぼ人形



また、神津島の花正月でキーワードになるのが「しつりばつちりばっちょんこができないように」という言葉。昔、子供たちはこのおまじないとも言える歌を歌いながらお詣りをし、トベラの葉を取って家に持つて帰つて家の囲炉裏で燃やしたんだそうです。トベラの葉は、「しつりばつちり」と音を立てて、表面がまるで疱瘡のようにぶくくなり、パンツ、パンツと破裂して燃えます。これを、子供たちの身代わりとし、疱瘡除けにしていたと伝えられています。



トベラの葉

しつりばつちり
ばっちょんこができないように



ほうそう神様には諸説あります

こちらの案内は諸説のひとつとし神津島に残る風習を知るきっかけにして頂ければ幸いです。また、他にご存知のことやエピソードがありましたら、HAPPY TURN／神津島事務局までお知らせください。

※実際にお詣りをする際は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、マスクの着用、こまめな消毒、密集して行動しない等の対応をお願いします。